

拓殖大学百科

(外国語学部編)

社会・地域に貢献する研究



拓殖大学は創立120周年を迎えます

校 歌

作詞 宮原 民平
作曲 永井 建子

maestoso

f メ テ ニ ブ ン カ ノ ヒ ヲ カ カ ゲ

フ ソ ウ ノ キ シ ニ コ エ ア ゲ テ

p ヤ ミ ハ ー キ エ ヨ ト ヨ ブ ハ タ ゾ

ヒ ト ハ ー サ メ ヨ ト ヨ ブ ハ タ ゾ

mf ア ア カ ガ ヤ ケ ル ユ ウ コ ン ノ ー

poco a poco *Rall*

ff ス ガ タ ゾ ワ レ ノ コ コ ロ ナ ル

校

歌

作詞 宮原 民平
作曲 永井 建子

一、
右手に文化の炬をかゝげ
扶桑の岸に声あけて
聞は消えよと呼ぶは誰ぞ
人は醒めよと呼ぶは誰ぞ
嗚呼輝ける雄渾の
姿ぞ我の精神なる

二、
雲は焰の色に飛ぶ
南国水はたぎるとも
春光永久にへだてたる
北地に氷とぎすとも
仰いで星を見るところ
拓かでやまじ我が行手

三、
人種の色と地の境
我が立つ前に差別なし
青雨ひとつ前に湿さば
確かな花咲かむ
使命は崇し青年の
力あふるゝ海の外

＜掲載内容＞

1. 学長挨拶	2
2. 外国語学部長挨拶	3
3. 語学関係研究所と地域連携センター	4
4. 教育研究を担う教員紹介	5
5. 拓殖大学地域連携センター会議委員	36
6. 編集後記（副学長）	37

=====
八王子国際キャンパスは、昭和 52 年（1977 年）の開設から今日まで
地域社会の皆様にご支援を頂ながら 40 有余年の月日が経過致しました。

本学は、これを契機として、これまでの歩みを基に、昨年(平成30年)
4 月に社会連携・貢献の一層の強化を図るとの観点から「地域連携セン
ター」を設置致しました。

この小冊子は「社会に開かれた国際大学」を掲げる本学を応援して下
さる地域社会の皆様には本学の教育内容をご理解頂く一助として作成した
ものです。多くの皆様にお手に取って頂き、お読み頂ければ幸いです。

尚、ここに掲載した内容に関するお問い合わせやご不明な点等がござ
いましたら、下記までご連絡下さい。

■拓殖大学地域連携センター（八王子事務部）

☎（042）665－1443

=====
表紙写真：長谷川文子准教授「外国人に人気の食品サンプル作りを体験」

－ グローバル時代の外国語教育、そして地域貢献 －

学 長 川 名 明 夫

(地域連携センター長)

拓殖大学は、アジアに、そして世界に貢献する真のグローバル人材の育成を建学の精神として、1900年（明治33年）に創立された歴史と伝統のある国際大学です。そして、海外からの留学生の数は約1000名に達します。

本学の八王子キャンパス（現八王子国際キャンパス）は、1977年に商学部、政経学部の1、2年生と外国語学部からなる3学部体制で発足しました。その後の変遷を経て現在では、外国語学部、国際学部、工学部の3学部からなる、学生数が約4000名の自然に恵まれた郊外型キャンパスとなっています。

八王子キャンパスにある、外国語学部、国際学部は、文字通り国際性の高い学部で、多数の留学生も在籍し、キャンパスにしながら国際交流ができる環境にあります。外国語学部では、世界の3大言語である、英語、中国語、スペイン語に関して単にその言語を話せるようになるというだけではなく、その言語を使う国や地域の文化や事情を理解することを目的に教育、研究を進めています。

八王子キャンパスの設置以来40有余年が経過しました。これまで、紅陵祭、スポーツフェスティバル、国際フェスティバル、語劇祭等を通して近隣の皆様とも交流を図らせて頂いてきた所です。しかし、各学部の先生方の教育、研究活動に関しては必ずしもご理解いただけていないのではないかと考えています。

特に、グローバル化の進展が目覚ましい今日、外国語学の分野における、本学の教育、研究の内容を多くの皆様、特に地域の皆様に知って頂くことは皆様のお役にも立つのではないかと考えこの小冊子を作成致しました。

拓殖大学は、国際的視野で地域社会の課題解決にも貢献できる「社会に開かれた国際大学」を目指し、地域社会と共生し、地域社会から信頼される存在となるべく、これからも人材の育成に邁進して参ります。

(工学博士)

－ 高尾から「世界へ捧ぐ」人材育成 －

外国語学部長 塩 崎 智

拓殖大学外国語学部は、学生数が1学年200人という、大学内で最も小さな所帯です。中国語学科とスペイン語学科になると各学科1学年50人ですから、1学科1クラスという感じで、同じ学年全員が顔見知りという雰囲気になります。

小所帯の割には教員数が多く、3学科で日本人教員、ネイティブ教員合わせて専任が30人、特任講師のネイティブ教員13人が中心となって語学指導に当たっています。この結果、ほとんどの授業で多くても1クラス20人ほどの少人数制が実現していて、語学教育に適した教育環境となっています。学生は、地元八王子はもとより、関東地方と山梨県出身の学生が大半を占めます。それに中部地方、東北地方近県が加わり、それ以外の遠隔地の学生も少数ですが在籍しています。

彼らに共通している点は、「専門の語学を活かした仕事に就きたい」という希望を持っていることです。「外国語で食べていく」というのはなかなか難しいことです。ですから、長期的なプランを立てて、30歳になるまでに外国語を使う仕事に就くくらいの気持ちで就職活動に臨むよう指導しています。

英米語学科の学生は、高校レベルの英語を、4年間で英語で論文を書き英国、米国などの現地の新聞を読み慣れるレベルにまで伸ばします。中国語学科、スペイン語学科の学生は、発音やアルファベットのような基礎から出発し、4技能バランスよく伸ばして、在学中に中国語、スペイン語の検定試験に合格できるような力を付けます。本学外国語学部のウリとして、「外国へのアクセス良好」という点が挙げられます。他大学と比べると、単位の換算、費用などの点で留学しやすい環境が整えられています。1ヶ月、7ヶ月、1年という様々なレベルの留学制度を活用し、学生たちはこの4年間で語学能力を飛躍的に伸ばし、社会に羽ばたいていきます。「原石」に磨きをかけて、自分が持っている力に気づかせ、いつの日か世界にはばたかせる。これが外国語学部のミッションと自任しています。

語学関係研究所と地域連携センター

●言語文化研究所

(所長：佐野正俊外国語学部教授)

言語文化研究所は、言語文化についての学術活動を発展させることを目標とし、次の事業を行っています。

- (1) 言語文化に関する調査研究
- (2) 言語文化に関する刊行物の発行
- (3) 言語文化に関する研究会、講演会、シンポジウム、公開講座等の開催
- (4) 研究所において実施することが適当と認められる言語教育
- (5) その他、研究所の目的を達成するために必要な事業

本研究所の特徴のひとつとして、公開講座「外国語講座（18カ国語）を夜間開講していることがあげられます。

本研究所の前身である日本語研修所（のち、語学研究所と改称され、現在、言語文化研究所）は、インドネシア共和国賠償留学生に日本語を教えるという目的のために設立されて以来、言語（語学）についての教育・研究を行っています。

●日本語教育研究所

(所長：阿久津 智外国語学部教授)

日本語教育研究所は、平成19（2007）年に「日本語・日本語教育」の研究と振興を課題として出発した教育研究機関です。日本語・日本語教育に関する調査・研究の成果を国内外に発信することにより、国際相互理解の発展に寄与する目的で以下の業務を行っています

- (1) 日本語に関する調査・研究
- (2) 日本語に関する教材開発
- (3) 仁尾本ご教育に関する刊行物の発行
- (4) 外国人・交換留学生・委託留学生等に対する日本語教育
- (5) 日本語教育に関する研究会、講演会、シンポジウム
- (6) 日本語教師養成講座等の開催及び運営

●地域連携センター

(センター長：川名明夫学長)

本学の教育・研究成果の知を基盤として国内外の地域社会との交流及び活性に貢献すること、また、学外諸機関とも連携して学生の実践的学修に資することを目的として、平成30年4月1日に八王子国際キャンパスに設置致しました。

尚、同センターの主な事業は、下記の通りです。

1. 地域社会及び学外諸機関との連携・交流・協働に係る活動の推進に関する事項
2. 地域社会及び学外諸機関との連携に係る協定作業に関する事項
3. 地域社会の課題等についての調査・研究に関する事項
4. センターの情報発信に関する事項
5. その他センターの目的を達成する 有益な事項

教育研究を担う教員紹介

○外国語学部 英米語学科

居村 啓子准教授「応用言語学」	8
遠藤 裕子教授「日本語の意味研究」	9
大野 英樹准教授「機能的統語論」	9
狩野 紀子教授「英語教授法」	10
佐野 正俊教授「国語科教育における文学教材論・文学教材開発・授業 実践研究」	11
塩崎 智教授「日米交流史、日本英学史」	12
長谷川文子准教授「第二言語習得における学習者要因」	13
藤本 淳史教授「コミュニケーション、テクニカル・ライティング [※] 、英語 教育」	14
保坂 芳男教授「戦前の旧制中学における英語教育の実態研究、英語学習 者の実態、外国の英語教科書の量的・質的比較」	15
見上 晃教授「PC を利用した音声英語教育、マルチメディア英語教育」	16
本橋 朋子教授「ビジネス・テクニカルコミュニケーション」	17
山田 政通教授「社会言語学と語用論」	18
渡辺 勉教授「認知言語学」	19

中国語学科

阿久津 智教授「日本語学」	20
浅井 澄民教授「中国語学・中国語口語発達史・中国語方言地理学・言語 接触」	21
小林 孝郎教授「自律学習論・言語文化論・外来語研究」	22

関口 美幸教授「ビジネス中国語及びその日本語訳の変遷、中国劇研究」	・ 2 2
趙 昕教授「日・中文章の口語表現の比較研究、中国文学、日本近代文学」	・ ・ ・ ・ ・ 2 3
中村かおり准教授「日本語教育学」	・ ・ ・ ・ ・ 2 4
永江 貴子准教授「現代中国語の地域差の研究」	・ ・ ・ ・ ・ 2 4
平山 邦彦教授「中国語学、現代中国語文法」	・ ・ ・ ・ ・ 2 5
丸山 浩明教授「中国語学文学、中国文化研究、中国語教育」	・ ・ ・ ・ ・ 2 6

スペイン語学科

瓜谷 望教授「スペイン語の冠詞の文法的研究、スペイン語指導法の開発研究」	・ ・ ・ ・ ・ 2 7
木村 政康教授「VT 法の発音指導」	・ ・ ・ ・ ・ 2 8
小池 和良教授「スペイン語の固定表現の意味・構造の分析」	・ ・ ・ ・ ・ 2 9
斎藤 純男教授「一般音声学、アルタイ言語学」	・ ・ ・ ・ ・ 2 9
濱松 法子教授「スペイン語教育、教材研究・開発」	・ ・ ・ ・ ・ 3 0
日比 哲也准教授「計測・制御工学」	・ ・ ・ ・ ・ 3 1
廣澤 明彦教授「スペイン語文法研究」	・ ・ ・ ・ ・ 3 2
松下 直弘教授「スペイン語圏の児童文学と伝承」	・ ・ ・ ・ ・ 3 3
安富 雄平教授「スペイン語音声学」	・ ・ ・ ・ ・ 3 4

英米語学科

■居村啓子准教授「応用言語学」

言語学博士

○研究分野・活動

研究分野は、応用言語学。主に第二言語習得、早期英語教育である。テーマは、子どもの第二言語習得に於けるチャンクの習得と分解。Tomasello の用法基礎モデルに於ける子供の言語獲得のメカニズムを外国語環境で検証する。これまでの研究から、日本人早期外国語学習者は初期段階に於いてまずことばを固まり（チャンク）で覚え、その後パターン認識を経て分解し、ことばをつくろうとすることが検証された。これは少ない言語インプットを駆使して、コミュニケーションを成立させようとする、子どもの本質的な言語活動を表す現象であり、全から個へ向かう言語習得の順序を示唆するものである。



オーストラリア、ブリスベンにて

○研究課題

これまでの研究からこどもは常に「ことばをつくる」存在であることが示唆されたが、

それはいつ、どのような条件で促進されるのかをさらに検証する必要がある。具体的には子どもが、チャンクによるインプットの時期から、固まりとしての発話時期、そしてことばを創造する時期に移行するための条件が何か、また創造言語はどのような環境で、どのタイミングで発せられるのかを検証したい。

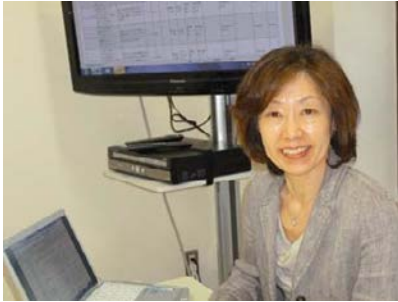
又初期段階でインプットされたチャンクの種類や性質によって、繰り出される創造言語の質は異なる。チャンクということばの現象そのものにも着目しながら、分野に貢献していきたい。

■遠藤裕子教授「日本語の意味研究」

文学修士

○研究分野・活動

研究分野は、現代日本語学と認知言語学で、日本語の意味研究を中心テーマとしている。認知言語学とは、言語を認知との関わりから探求するものであり、外的



特別演習で

世界との相互作用を通じて対象を言語化する際のプロセスを探求するものである。認知の過程においては、人間の身体性に基づく普遍的基盤や、経験といった文化・社会的要因が関わっていると考えられる。言語は主體的なものであり、あらゆる言語表現は、対象についての表現であると同時に、言語主体の認識についての

表現でもあると考える。

○研究課題

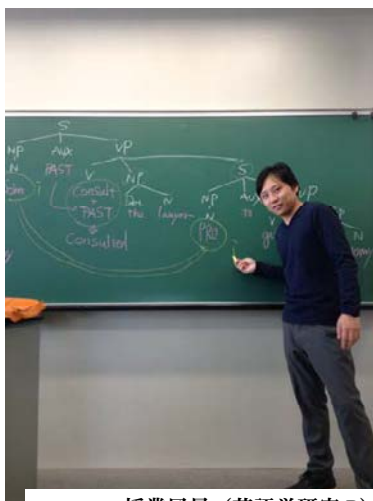
意味研究の一環として、多義語と概念メタファーを研究対象とする。互いに何らかの関連性を持つ動詞群・形容詞群などの複数の語について、意味の拡張・多義構造・関連語との異同・語彙体系上の位置づけなどを明らかにする（視覚スキーマと格表示による多義構造図、など）。また、概念メタファーの観点から、メタファーによる拡張義について、複数の語の意味的關係性や使用の制限なども明らかにする（「晴れる」のメタファー、など）。日本語教育の指導につながるような事例研究と記述法の研究も課題としている。

■大野英樹准教授「機能的統語論」

MA in Syntax

○研究分野・活動

専門分野は機能的統語論。英語や日本語における様々な言語現象を、統語論を基礎にしながら、意味や機能の観点も考慮に入れ分析を行っている。分析手法は、適格文と不適格文を用い、それらのデータを一括して説明することが可能な一般的制約を導き論じるというものである。本研究における最大の関心は、統語領域と意味・機能領域の相関関係を明らかにすることである。これまでの主な研究テーマとして、英語学分野では「二重目的語構文」、「数量詞遊離」などがあり、日本語学分野では「謙譲語」、「数量詞かき混ぜ」などがある。



授業風景（英語学研究 B）

○研究課題

現在は、日英語の数量詞遊離文の比較分析をテーマに研究活動を行っている。具体的には、(i) 日英語で遊離数量詞が生起し得る位置はどのように決まるのか、(ii) 数量詞遊離が起こる理由について日英語でど

のような共通点・相違点がみられるのか、(iii) 英語に比べて日本語は数量詞の遊離が自由であるが、その理由はなぜか、という３点について考察を進めている。また、遊離できる数量詞と遊離できない数量詞のデータ分析、遊離数量詞と類似する英語の再帰代名詞（強調用法）の分析にも関心を持っている。

■狩野紀子教授「英語教授法」

教育学博士

○研究分野・活動

英語教授法、特にリーディング、ライティング、リスニング方略を中心に研究を進めている。また、近年多様化する大学生の興味、関心、学力、学習動機やニーズをアンケートやインタビューで調査・分析し、個人差に対応した教授法や教材の開発、e-ラーニングシステムの構築を行っている。さらに、語学教育と初年次教育、専門教育との連携も考慮し、情報検索、ノート・テーキング、情報の記名・保持・想起、ディスカッション、プレゼンテーション、自己の学習をモニターするメタ認知スキルなど、汎用性が高いスタディ・スキルの伸長を目的とし、授業の中で実践しその効果を検証している。

○研究課題

情報技術が発達した今日の社会では、多くの情報は英語で発信されている。分析的かつ批判的に考え、情報の価値を正しく評価し、情報を統合し、さらに新しいアイデアを創造していくことが、現代の大学生に求められる能力であろう。そのために必要となる、英語での情報収集能力、情報統合能力、情報発信能力を伸長する。つまり英語のリーディングやリスニング、ライティングやスピーキングの4 skills を統合する教授法を今後の研究課題としている。さらに、EAP (English for Academic Purposes) および ESP (English for Specific Purposes) を統合したカリキュラム構築も考えている。

■佐野正俊教授「国語科教育における文学教材論・文学教材開発・授業実践研究」

修士（教育学）

○研究分野・活動

国語科教育における文学教材論・文学教材開発・授業実践研究が研究分野であり、研究対象として取り扱う文学作品は日本近世文学と日本近現代文学である。また文部科学省検定教科書の編集委員として高等学校国語科用教科書（「現代の国語」

「言語文化」) 作りにかかわっている。

○研究課題

これからの研究の中心的な課題は、現在までの自分の研究を発展的に展開させた文学教育理論研究にある。これまで専門的に取り組んできた文学教材論研究の枠を拡大し、文学教育論史研究、文学教育実践史研究を深めたいと考えている。いずれの研究も机上の研究に終始することなく、現代の教育の課題との関連を強く意識して行きたいと考えている。さら

に教育理論研究と、実践レベルでの教材・カリキュラムの開発研究を融合させて、問題解決のためのコミュニケーション行為力の育成という観点から、学生諸君の日本語リテラシー育成および向上のためのプログラム研究と実践にも取り組みたい。



2011年に刊行した著書

■塩崎 智教授「日米交流史、日本英学史」

文学修士

○研究分野・活動

幕末維新期に日本からアメリカ合衆国に渡航し、現地で学んだ留学生の史料収集と分析分野的には日本近代史となるが、留学生たちが米国に残した史料の分析を行う際には、米国史、米国社会、文化などに関する知識も必要となる。大変学際的な分野であるので、研究分野を便宜的に日米交流史とした次第である。

研究活動は、年2回渡米し、ニューヨークを中心に史料収集を行っている。アメリカは史料に関しても大変オープンな国で、インターネット上のデータベース検索機能が日進月歩という印象を受ける。



「拙著、2001年出版」

○研究課題

日本の近代化に重要な貢献を果たした人物には、欧米留学経験者が多い。よく知られている例を挙げれば、大臣伊藤博文（イギリス）、西園寺公望（フランス）、桂太郎（ドイツ）といった総理大臣、小林寿太郎（アメリカ、外務大臣）、森有礼（アメリカ、文部大臣）などの閣僚などがある。教育界では、新島襄（同志社大学）、津田梅子（津田塾大学）、軍人では、東郷平八郎（イギリス）、文化人では、夏目漱石（イギリス）、森鷗外（ドイツ）などが知られている。これ以外にも、日本の近代化に現場レベルで貢献した留学経験者も多い。彼らが いつ、どこ

で、誰に、何を学び、いつ帰国し、帰国後はどのような貢献をしたのか、といった基本的な史料収集を進め、可能な範囲で歴史的な分析も行っている。

■長谷川文子准教授「第二言語習得における学習者要因」

修士（英語教授法／言語学）

○研究分野・活動

第二言語習得、特に個人差を生む要因の一つである、各学習者の持つ内的要因に焦点を当て、英語学習との関わりについて研究を進めている。英語習熟度に違いをもたらす要因は数多く存在するが、その中でも言語学習の成功に重要な役割を果たすと考えられている情意的要因や母語能力との関係について取り組んでいる。

○研究課題

バイリンガル教育における心理言語学的な理論の中に、母語発達の重要性を唱えているものがある。これは母語と第二言語間での能力の転移可能性に関する仮説の1つで、母語が獲得された後に第二言語が獲得される場合、母語の基底にあるものが第二言語に転移するという考えである。そのため、母語やそれに伴う認知力が発達しているほど、第二言語も発達しやすいという主張である。つまり、生得的神経機能に依存する均質的な母語習得と異なり、成人の第二言語学習者は認知能力の発達度と語能力を読書量と合わせて調査、分析をしている。大学生の読書量測定のための指標の作成に取り組み、母語における読書量を第二言語到達度における個人差を生む要因の一つとして考察することを研究課題としている。



ゼミ活動の様子

■藤本淳史教授「コミュニケーション、テクニカル・ライティング、英語教育」

教育学修士、Master of Arts in Professional Writing (MAPW)
Master of Education (EdM)

○研究分野・活動

ここ数年来、私の研究テーマは、コミュニケーション、テクニカル・ライティング、英語教育の3分野である。具体的には、異文化間の文書コミュニケーションが主な研究テーマとなる。即ち、第1に、情報の送り手は、受け手の立場や状況を理解し誤解を軽減させるためには、どのようにしてより良いコミュニケーションを構築できるのか。第2に、異文化間のコミュニケーションを図るためには、

自分の文化と同じように相手の文化を理解することが必要であるので、その一方
法として、英語でのコミュニケーション・レトリックをさらに考察することであ
る。

○研究課題

「コミュニケーションの構築」と「コミュニケーション・レトリックの考察」の
2点に焦点を絞って推し進め、それを主に文章におけるコミュニケーションを中



執筆に携わった著書

心に研究していくことが課題となる。

具体的には、アメリカ食品医薬品局
(FDA)におけるリコール文書を分析
し修辞的特徴の研究をしている。上
記の研究課題に加え、①英語接客マ
ニュアルを作成（首都圏鉄道会社と
首都圏警備会社）し企業における英
語使用についての研究(ESP／nglish
for Specific Purposes)と②効果的

なりスニング力向上方法についての研究も進めていきたい。さらに 2019 年度はポ
ピュラー音楽に関する邦訳本と「科学・ビジネス英語活用辞典」（仮）が出版予
定であるので校正作業を続けていきたい。

■保坂芳男教授「戦前の旧制中学における英語教育の実態研究、英語 学習者の実態、外国の英語教科書の量的・質的比較」 博士（教育学）

○研究分野・活動

私の主な研究領域は以下の3点である。1つ目は、戦前の旧制中学における英語
教育の実態を明らかにすることである。主に、お雇い外国人に焦点を当てて研究

を進めている。昨年度までは、山口県の岩国中学、徳山中学、豊浦中学、萩中学、山口中学の英語教育の実態を明らかにした。他府県では、京都中学や神戸中学、小田原中学のお雇い外国人を調べている。

2つ目は、英語学習者の実態を明らかにすることである。2016年3月に新学習指導要領下で英語教育を受けた高校生が大学に入学した。彼らを対象に、英語で授業をすることの是非、有り方についても研究課題としている。

3つ目は、外国の英語教科書の質的・量的比較である。主に準動詞に焦点を当ててアジア諸国の英語教科書を比較・分析を行っている。

○研究課題

1つ目に関しては、全国47都道府県の戦前の英語教育の実態も明らかにできればと考えている。

2つ目に関しては、いわゆる偏差値の高い進学校や、普通程度の学校、英語教育に特化した高校、さらには中学校の調査も行いたい。

3つ目に関しては、アジアを中心に初等レベルの英語教科書の比較分析を行いたいと考えている。

■見上 晃教授「PCを利用した音声英語教育、マルチメディア英語教育」

言語学修士 (MS in Linguistics)

○研究分野・活動

PCや教育機器を利用した音声英語教育、マルチメディア英語教育を行う方法を研究している。

○研究課題

映画を中心にした映像を英語理解や英語コミュニケーションに役立てる方法を模索している。映画の一部をweb上やCD-ROMに蓄え、聞き取り用に役立てたり、

そのテキストデータを加工して英語理解に利用したりする方法を考えている。以前は映画や音声はアナログで保存されていたのでアナログ→デジタル変換する事が多かったが最近では教材CDやDVDからの直接デジタルデータお取り込んで利用している。

■本橋朋子教授「ビジネス・テクニカルコミュニケーション」

修士（商学）、M. S.

○研究分野・活動

「ビジネス・テクニカルコミュニケーション」：英語によるドキュメンテーション・デザインのレトリックを中心に研究している。中でも、メッセージのもつトーンの役割に関心がある。トーンは、読み手に対する書き手の心象であり、同じ内容のメッセージであっても、トーンの相違により、読み手の受ける印象が変わる。つまり、通信の目的、対象、通信文の種類などにより、その場にふさわしいトーンを選択できれば、コミュニケーションはより円滑になる。しかしながら、我々、外国人学習者にとって、トーンを使い分けるのは難しい。そこで、適切なトーンを作り出す技法を探り、学校教育において、トーン的重要性を指導する意義を考察している。



執筆に携わった主な書籍

○研究課題

マルチメディアを活用したドキュメンテーション・デザインに関心がある。コンピュータ、インターネットなどの普及によって、新たに生じているコミュニケーション上の諸問題について取り組んでいきたい。たとえば、米国で盛んなコンテ

ンツマーケティングの手法が日本でも最近取り入れられており、情報伝達の重要性は高まる一方であるが、コンテンツのデザインに関する研究は数少ない。コンテンツマーケティングでは、マーケティングツールとして用いられるドキュメントも多様化している。こうした様々なドキュメントに関して、目的や対象に合わせた内容、論理構成、トーンの他、ビジュアルデザインの観点からも効果的なコミュニケーションの技法を考察したい。

■山田政通教授「社会言語学と語用論」

言語学博士

○研究分野・活動

研究分野は、言語学の中の「社会言語学」と「語用論」です。言語学というと難しい文法を思い起こす方が多いでしょうが、私の興味は、日常生活の中で人が実際にどのように言葉を使っているかという、現実的な問題です。その時大切なのは、その場を取り巻くコンテキスト（場面）です。同じ話者でも、場面が違くと使う言葉も自然と変わります。フォーマルかインフォーマルかという区別が一番わかりやすいかもしれませんが。さらに実際の場面では、お互いの社会的地位、親密度、年齢、性別なども複雑に絡みます。英語と日本語を中心に、映画、広告、新聞、雑誌、ネットなどから具体的な例を集めて分析中です。また、ゼミナールでは、社会言語学をテーマにしています。



ある日の授業後の昼食会

：ゼミナール・メンバーと著者（右端）

○研究課題

(1) 「否定文の語用論」

否定文はどの言語にも存在しますが、私たちは普段どのようなコンテキストでこの文を使うのかは意識していません。この無意識な部分を、実際の談話の中で調べて解明するのが私の課題です。勿論、否定文は物事を否定する時に使いますが、同時に対比や裏切られた期待を表現する時にもよく使用されることがわかってきました。

(2) 「文化的反義語の分析」

日本語では「山」の反対は、多くの人にとって「海」ですが、アメリカ人の多くは「mountain」の反対としては、「valley (谷)」を挙げるそうです。このようにある文化を基盤にした反義語の体系を解明するのが、私の目標です。この研究は、外国語学習や翻訳・通訳などに役立つと考えています。

■渡辺 勉教授「認知言語学」

文学修士

○研究分野・活動

私の研究分野を包括すると1990年代以降の枠組みでは、認知言語学となります。細目は、英語音声学、英語意味論、英語語形成論です。具体的には、婉曲語法、品詞転換、結合価、能格動詞、複合語のアクセント・強勢、アクセントのレベル、などを分析対象として来ました。研究の成果は論文として発表してありますが、英語辞書の執筆の際に生かされたものもあります。

○研究課題

私のこれまでの研究姿勢は、抽象的なモデルの構築を目標として来ませんでした。しかし、Langacker に代表される認知言語学の枠組みで意味に関する問題を再検討する必要があります。婉曲語法は」、古典のカテゴリー論ではなく、プロトタイプ論での見直しが必要です。品詞転換は profile (認知的際立ち) の数が変わ

る現象と言えるでしょう。結合価の問題は、ひとつの文の中で何を際だたせて figure (図) とし、何を ground (背景) 」とするかという問題に関わると思われます。英語のアクセントの問題は、研究者の間で共通の話が成り立つように記述の枠組みを検討中です。長期的には、意味論も音声学も包含して、ロンドン大学の Hudson が提唱しているようなネットワーク (network) 構築の一部分に貢献したいと考えています。

中国語学科

■阿久津智教授「日本語学」

博士 (文学)

○研究分野・活動

日本語学：主に、日本語の音韻、語彙、および文字・表記に関して、その諸現象を探究すべく、文献資料を中心に、資料の収集やデータ分析、考察などを行ってきました。現在は、音韻に関して、主として、語誌的な研究を行っています。（「研究課題」参照）。ほかに、最近では、古典文法（漢文を含む）や、日本語史などについて、教育・学習に活用するための研究も行っています



大学院言語教育研究科の授業

○研究課題

「音韻に関する語誌的な研究」：音韻に関する用語や概念について、その由来や意味・用法の変遷をたどるとともに、各時代における音韻観などを探る研究を行っています。これまでに、「音韻」、「母音」、「子音」、「音節」、「音素」、「単音」、「発音」、「音声」、「声音」、「音」、「音韻論」、「音声学」、「音韻学」などの語誌について、研究成果を発表してきました。今後、伝統的な

音韻学（声韻学）や、現代音韻理論などの観点も取り入れた研究を行いたいと考えています。

■浅井澄民教授「中国語学、中国語口語発達史、中国語方言地理、言語接触」

修士（文学）

○研究分野・活動

「中国語学、中国語口語発達史、中国語方言地理学、言語接触」：現代中国語を基点に口語発達史（文法・音韻）を研究している。現代中国語の文法・音韻の理解の上に、通時的には歴代口語文献資料の研究、共時的には中国語諸方言や中国語周辺諸言語の研究も包含する。現代中国語は音韻は北京語を基礎方言とし、語彙語法は広く北方語を基礎とするが、その成立過程を明らかにするには北方諸言語（満州語、モンゴル語等）との言語接触の影響も視野に入れる必要がある。

「中国語教育」：日本語を母語とする日本人が現代中国語をマスターするには如何に教えるか主に授業を通して検討していきたい。」

○研究課題

「中国語学・中国語口語発達史・中国語方言地理学・言語接触」：これまで現代中国語の‘没’と‘没有’また[mei]（没）の音韻的由来について、現代語の文献資料や方言地理学的アプローチで北方諸言語の影響について指摘してきた。また歴代口語文献資料としては、近年発見された新しい資料「旧本老人乞大」に基づき、疑問詞と疑問文、句末の‘有’について検討し、やはり北方諸言語の影響について指摘した。今後は台湾語の‘有’と‘無’の文法化について明らかにし、現代語の否定詞‘没有’や疑問の語気助詞‘嗎’の文法化の過程について明らかにしていきたい。

「中国語教育Ⅲ」：これまで、外国語教育におけるアクティブ・ラーニングと動

機づけについて検討してきた。今後は外国語教育と外国語学習について本学の先学にその知恵を学んでいきたい。

■小林孝郎教授「自律学習論、言語文化論、外来語研究」

教育学修士

○研究分野・活動

「自律学習論」「言語文化論」「外来語研究」についての研究をしている。「自律学習論」の研究では、主として実践的方法の考察を進めているが、近年は科研費課題番号 22622058 “Self-Learning Surface for Learning Kanji” (2016-19) の作成に注力している。また、「言語文化論」においては、日本語と日本文化の関連についての研究を、「外来語研究」では、日本語語彙体系における外来語語彙の意味変容の研究を行っている。

○研究課題

上記研究活動から「サイレント・ウェイ理論を基盤とした自律的学習デバイスの開発」「外国人留学生からみた日本文化の表象についての分析」「外来語の意味的拡大についての研究」を課題として研究計画を策定している。

■関口美幸教授「ビジネス中国語及びその日本語訳の変遷、中国劇研究」

修士（文学）

○研究分野・活動

研究分野 A ビジネス中国語及びその日本語訳の変遷：日中間のビジネス往来の多様化に伴い、ビジネスの現場では日々新たな用語が生まれている。特に今世紀に入ってからは、日本語を由来とするビ



「中国現代文学」誌で中国の小説や脚本の日本語訳を発表

ビジネス中国語が増加している。中国の日系企業で働く中国人及び日本人のビジネス中国語及びその日本語訳の使用状況について調査を行い、それを教学の場でも役立てたい。

研究分野 B「中国劇研究」：中国の地方劇、特に湖南省の花鼓戲の発展状況について調査する。特に代表的な花鼓戲の脚本については日本語に訳し、発表する。

○研究課題

研究分野 A：中国ビジネス関連の全国紙（例：中華工商時報など）からビジネス用語を抜き出し、その日本語訳の変遷を調べる。中国の日系企業で働く中国人及び日本人にビジネス新語に対するアンケート調査を行い、その変化を分析する。

「職場小説」からビジネス新語の抜き取り調査を行う。

研究分野 B：「中国劇研究」中国の伝統地方劇に関する資料（脚本、DVD、論文など）を収集し、代表的な劇については、脚本を日本語に訳して、広く日本に紹介していく。

■趙 昕教授「日・中文章と口語表現の比較研究、中国文学、日本近代文学」

博士（社会学）

○研究分野・活動

日・中文章と口語表現の比較研究、中国文学、日本近代文学

○研究課題

文学作品を中心に、日本語作品を中国語に、または中国語作品を日本語に訳し、方法論と技術論の角度から日・中言語表現の異同などを分析し、整理していく。



「過去に発表した論文」

■中村かおり准教授「日本語教育学」

学術（修士）

○研究分野・活動

「日本語教育学・指導法」日本語の特性を明らかにし、学習者のニーズに合わせ



た指導法とそのための教材開発に関心がある。現在は主に次の分野に関して、研究を行っている。1. 各文法項目に関する指導法の研究（助詞、受身など）、2. アカデミックライティング研究、3. 漢字学習および指導法の研究。

○研究課題

ゼミ生の発表@日本語教育方法研究会

今後は、上記の研究活動の中で

も、以下の点について研究を深めていきたいと考えている。1. 助詞学習を支援する教材開発、2. アカデミックライティング指導方法の研究、3. 漢字学習を支援する教材開発。

■永江貴子准教授「現代中国語の地域差の研究」

博士（人文科学）

○研究分野・活動

これまで中国語文法と中国語教育についての研究を行ってきた。まず中国語文法に関しては、“幫”についてやや文法化している例を取り上げ、“給”と比較しながらいわゆる中国語の標準語とされる普通語と台湾語及び上海など地域差を観察しながら論じてきた。その結果“幫”と“給”という語の類似点と文法レベルでの差異、要求表現における“給”を用いた文の失礼さの要因などについて言及

した。また、ICTを活用した資格試験対策を実施した結果、その成果と問題点をアンケートから分析し、効果的な e-learning 構築のための資料として提出した。

○研究課題

今後も従来に引き続き、中国語文法をめぐる諸問題と中国語教育についての研究を行う。まず中国語文法について、「助ける」という意味の“幫”が従来観察されなかった文法化している現象について、ポライトネスから説明する。中国語教育については、ICTを活用した資格試験対策の」ため、WEB ページ



2018 ゼミ旅行香港

を構築する。また通時的研究として中国大陆において、その教育の近代化に寄与した日本人を引き続き調査・整理する。

■平山邦彦教授「中国語学、現代中国語文法」

修士（言語学）

○研究分野・活動

中国語学、現代中国語文法：一つの言語を習得していく上で、そこに存在する文法規則を見つけることで、効率よい語学学習が行えるのは明らかな事である。そして、文法研究の意義は正にここにあるといえるだろう。特に以下を着眼点としている。

（１）構文（表現）を用いた伝達の根本意図の解明。（２）SV0 を核として展開された語順の特徴の解明。どの言語でも当てはまることであるが、中国語の中では語順の果たす役割が極めて大きいものとなる。中国語も一般に SV0 語順の言語といわれるが独特の色彩を呈しており、そこに貫かれた原則を理解することは必

要不可欠である。この問題について、中国語はもちろん日本語等他言語の語順原則も参考にしながらその原因を究明していく。

○研究課題

最近是中国語の前置詞構文を用いた語順問題をテーマとしている。中国語は英語等のSV0言語同様前置詞をとる。但し英語と異なり、前置詞フレーズ（前置詞＋名詞）は動詞や形容詞の前に置かれるという基本的な特徴を持つ。しかし、個々の前置詞フレーズに目を当てると、様々な振る舞いが見られる。例えば、動詞の前のみならず文頭に置かれるタイプも存在する。更には複数の前置詞フレーズを用いる時、その語順はいかなる形になるのか等も重要な問題の一つとなる。このような課題点について、中国語文法理論及び様々な言語学的手法を用いて解明を試みていく。更には、中国語の連用修飾構造、話題構造との相互作用関係等も視野に入れてアプローチを試みている。

■丸山浩明教授「中国語学文学、中国文化研究、中国語教育」

博士（文学）

○研究分野・活動

中国語学文学、中国文化研究、中国語教育

○研究課題

（１）明清小説

文学では、明代清代の小説を専門としている。出版文化との関係から、版本探求や清代末から民国期に流行した石印本を追いかけている。高校の模擬講義や一般市民講座では、『西遊記』『水滸伝』など日本でもなじみ深い小説の味わい方や漢詩の味読、日中文化交流における中国をテーマに講義を担当している。

（２）中国語教育

コンピュータを利用して、自己学習の到達度を定期的に測定できる「アダプティ

「項目応答理論」による中国語テストを開発した。「聴解」「語彙」「文法」「読解」の4分野においては、通称 C-CAT として無料で運用しているので、活用して欲しい。

スペイン語学科

■ 瓜谷 望教授「スペイン語の冠詞の文法的研究、スペイン語指導法の開発研究」

言語学博士

○研究分野・活動

1) 「スペイン語の冠詞の文法的研究」：スペイン語の定冠詞／不定冠詞／無冠



「スペイン語相互学習」

詞の選択に關与する意味論・語用論・統語論的な様々な要因の解明を研究。名詞句内の主要部の名詞ではなく修飾部の名詞における冠詞の有無の条件を中心に研究してきた。

2) 「スペイン語指導法の開発研究」：

スペイン語の効果的な教育方法開発のための実証研究として、上級生が下級生にスペイン語文法を一年間に渡って指導するプログラムを実施し、学習理解度、学習意欲、対人関係スキルにどのような影響を与えるか調査している。

○研究課題

1) 「スペイン語の冠詞の用法研究」：定冠詞は原則として名詞句が特定の指示対照に言及するときに使用されると説明されるが、それにあてはまらない用例もたくさん存在する。それら例外的なデータを一般化して説明する原則を探るために動詞の語彙的な意味の影響を探るのが現在のテーマとなっている。

2) スペイン語指導法の開発研究：7つの学習方法比較調査（出典：米 National Training Laboratories）によると「一番効果的な学習法とは自分の理解した内容を人に教えることだ」という調査結果が示されている。そこで、スペイン語の文法学習においてその効果を検証するために、上級生が下級生にスペイン語文法を指導する授業科目「スペイン語相互学習」を設置し、授業内で実証研究を行っている。

■木村政康教授「VT法の発音指導」

文学修士

○研究分野・活動

VT法の発音指導・矯正法の実践研究及び普及活動（研究会、講習会等）、講師の養成を行うとともに、そのテクニックである身体リズム運動、わらべうたリズム、振動器、音響フィルタなどを日本語学習者の発音矯正に取り入れ実践している。

また、聴覚障害者がどのように音声を取っているのか疑似体験する機器について他大学の先生方と共同研究している。



論文指導での一コマ：体の動きを活用した
発音指導の実践を紹介

○研究課題

現在検討中の課題としては、「日本語の無声音と有声音の最適周波数の確定」、「触振動感覚を利用した特殊音素（促音、長音、撥音）、イントネーション及び、有声・無声弁別の指導法の研究」、「VT法による日本語聴解教材の開発研究」、「音声編集ソフト Audacity を用いた音声指導法の研究」があげられる。また、聴覚障害者の音声聴取の仕方を疑似体験する機器の開発研究を課題とした研究会を

定期的に開いている。

■小池和良教授「スペイン語の固定表現の意味・構造の分析」

文学博士

○研究分野・活動

現在の研究分野「スペイン語の固定表現の意味・構造の分析」



授業風景

慣用句・コロケーションを中心としたスペイン語の固定表現の収集し、現在までに4万ほどの固定表現のコーパスを作りました。このコーパスを使用して、多国籍言語であるスペイン語の慣用句とコロケーションを統語的、意味的観点から分析しています。また、スペイン語の固定表現辞典を作成中です。

○研究課題

現在は以下の3つの課題に取り組んでいます。

1. 信頼性のあるスペイン語のコロケーションのコーパスの作成
2. スペイン語のコロケーションの意味分析（ある語はなぜ特定の語と結合するのかを、意味論的観点から分析しています）
3. スペイン語の固定表現辞典の作成（慣用句・コロケーションの使用環境を考慮した辞典を構築中です）

■斎藤純男教授「一般音声学、アルタイ言語学」

文学修士

○研究分野・活動

一般音声学：母音調和など音声現象について

アルタイ言語学：主にモンゴル系・テュルク系諸言語の音声と語彙について

○研究課題

リアルタイム MRI を用いた調音運動の研究グループにおける課題のひとつとして、母音調和の基盤となる音声学上の特徴が何であるかを、声道の三次元データを基にした音声合成もおこないながら明らかにする。

すでに収集済みのアラビア文字モンゴル語資料に基づいて、西部中期モンゴル語の音声と語彙の研究を進める。

■濱松法子教授「スペイン語教育、教材研究・開発」

博士（文献学）

○研究分野・活動

研究分野：スペイン語教育（ELE）、
教材研究・開発

研究活動：日本語話者を対象にしたスペイン語教育の研究を行うとともに、サラマンカ大学と共同で教材開発中。近年は、動機付けに関する調査を行い、学修に対するモチベーション

を高める研究や、ヒューマンコミュニケーションを取り入れた授業に取り組んでいる。学修を通して、語学力だけでなく、社会人基礎力も同時に身につけられるような教材開発を目指している。その他 DELE（スペイン語検定）対策の辞書編纂、ICT を活用した授業を実践。



「スペインの国立通信大学（通称 UNED）から派遣されて来た先生の研究調査に協力してくれた学生達とともに」

○研究課題

スペイン語教育においては 2006 年に Instituto Cervantes（スペイン語教育及び

スペイン語圏の文化普及を目的とした公的機関)がPlan Curricular del Instituto Cervantes (PCIC:スペイン語のためのヨーロッパ共通参照枠参考指導要領)を発表した。コミュニケーションを重要視したこの指導要領がスペイン語教育・学修の際の指針となっており、教材に反映され、DELE(検定試験)もCEFRに基づいて作られたPCICに従ってレベル分けされている。文法はコミュニケーションで役立つ文法という概念が強調されている。そのような状況において、コミュニケーションを重視する教授法に慣れていない学修者あるいは授業者双方が利用しやすい教材及び教授法の開発が課題である。コミュニケーションを促す教材の開発では、思考を活性化させるための工夫が求められる。

■日比哲也准教授「計測・制御工学」

工学修士

○研究分野・活動

研究分野：計測・制御工学

人間が自動車を運転する場合、「認知」、「判断」、「操作」の3要素が必要となる。

これを機械に代行させるものが自動運転である。その車両をインテリジェントビークルもしくはスマートビークルと呼ぶ。近年、車両の性能は各種の技術開発により著しく向上し様々な自動化が行われている。しかしインテリジェントビークル、特に自動車の研究ではまだまだ初歩段階から抜け出していない。この研究では現行の交通規則の下で走行環境を考慮した自動運転の可能性を研究している。

○研究課題

研究課題：インテリジェントビークルの視覚情報処理に関する研究

本研究では、このインテリジェントビークルのシステムのなかでも視覚情報の認識に注目しマシンビジョンによる視覚情報の認識についてソフト、ハードの両面

の研究を行い、無人化走行への情報支援システムへの構築を目的とする。インテリジェントビークルの中で特にロボットビジョンを用いた自動車に関する研究は、現在各自動車メーカーなどが種々の研究機関と共同で行われているが、白線（センターライン）の認識や誘導システムなど車両が単独で走る場合の安全面への研究が盛んであるが、様々な道路標識などを認識する研究はあまり例をみない。本研究ではこの標識認識などにも着目し GPS との組み合わせによる発展性も考えられる。

■廣澤明彦教授「スペイン語文法研究」

修士（言語学）

○研究分野・活動

研究分野：スペイン語文法研究

ファン・デル・エンシーナは15世紀のスペインでいくつかの戯曲を残したが、その中に中世のレオン方言の資料が残っていることをメネンデス・ピダルは『レオン方言』（1906）で指



摘している。そこで『拓殖大学語学研究』

『レオン方言』（M. ピダル著）

125号、129号にて、そのレオン方言的特徴の抽出のため、文法的特徴の解説を試みた。ただし131号にて扱った彼の作品、全部で8作ある「牧人劇」のうちの第3作目、からはレオン方言が用いられていないことは、研究者の間で周知の事実となっている。133号にて「牧人劇」第3作目の後半部分の注釈を発表した。

○研究課題

『拓殖大学語学研究』132号からはピカレスク小説の嚆矢である Lazarillo de

Tormes の文法的注釈を始めた。1 章の注釈は紙数の関係から 3 回に分け、2 回目を 1 3 4 号で発表した。平成 2 9 年度中に 1 章の最終部分を 1 3 7 号にて発表、1 3 8 号から第 2 章の発表を始めた。

■松下直弘教授「スペイン語圏の児童文学と伝承」 文学修士

○研究分野・活動

研究分野：「スペイン語圏の文学と伝承」



神話・伝説・昔話を紹介した読み物と
スペイン児童文学の翻訳

広大なスペイン語圏は社会も文化も実に多様で、優れた詩人や小説家を何人も輩出している。そうした作家たちが現れる背景には豊かな伝承文化があるのではないかと考え、文学と伝承の関係について考察している。

三十数年前から、スペイン語圏の神話・伝説・昔話について雑誌や単行本で紹介し、解説を加えてきた。

また、いくつかの伝説の起源について

の考察も論文にまとめたことがある。さらに、ラウラ・ガジェゴ・ガルシア作『漂泊の王の伝説』『この世のおわり』など、現代スペイン児童文学の翻訳と紹介も行ってきた。

○研究課題

次の 2 つを研究目標にしている。

1. スペイン語圏の伝説とその背景に関する考察
2. 文学作品に見られる口頭伝承の影響

特に、メキシコやペルーに伝わる伝説がどのような社会背景の中で生まれたのか、そして、近代の作家たちがそれらをどのように自分の作品に取り入れていったかを調べているところである。

■安富雄平教授「スペイン語音声学」

文学修士

○研究分野・活動

研究分野：「スペイン語音声学」

現代スペイン語のプロソディー（リズム、アクセント、イントネーション）の実験音声学的手法による研究。

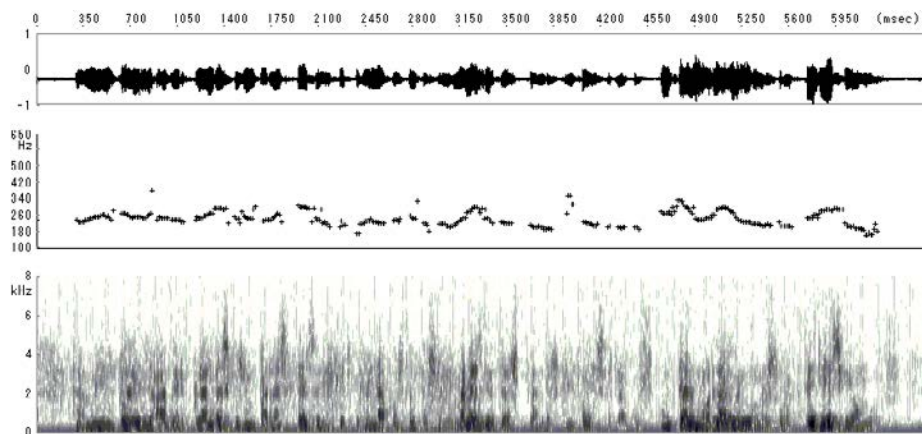
スペイン語のアクセントは基本的には1語1カ所で、その位置は簡単な規則によって決まる。しかし、このアクセントとは別に *acento de insistencia*（強調アクセント）と呼ばれる特殊なアクセントが観察されることが以前から知られていたが、しばしば第二強勢と混同されることがあった。筆者らの研究で、強調アクセントは通常のアクセントと同様の音響要因が語の別の音節にも重複して生じていることから、第二強勢ではなくアクセントが二カ所に生じた「ダブルアクセント」の語であることが明らかになった。また、強調アクセントの生じる音節は、語の通常のアクセントのある音節に、1～4音節先行することも分かった。音節数の短い語では語境界を越えることも分かっている。

○研究課題

現在の筆者の興味は「音声の余剰情報」と「スペイン語のイントネーション」、また「自律型音声聴取教材の開発」にある。

イントネーションの研究は実験音声学のテーマとしては比較的新しく、その記述方法と共に今後発展が期待される分野である。現代スペイン語では、文を記憶の為に暗唱したり、テキストにざっと目を通す為に早いスピードで音読したりする

場合に、通常のイントネーションとは異なった単調なリズム・イントネーションが現れる。筆者はとりあえずこれを「無感情イントネーション」とよび、その記述と音響的な分析を試みている。プロソディー要素の余剰性が低い発話の好例と捉え、日本語の同様のリズム・イントネーションとの対照も検討している。



スペイン語の無感情イントネーションリズムの波形・ピッチ曲線・スペクトログラム
 ピッチ曲線に何回も現れる山型のピークが単調な繰り返しを示す、無感情イントネーションリズムの特徴。

＜拓殖大学地域連携センター会議委員＞

1. センター長	学 長	川名明夫
2. 副センター長	副学長	山田政通
3. 副センター長	国際学部教授	佐原隆幸
4. 委 員	商学部准教授	松橋崇史
5. "	政経学部教授	山本尚史
6. "	外国語学部教授	関口美幸
7. "	外国語学部教授	藤本淳史
8. "	工学部准教授	工藤芳彰
9. "	工学部准教授	永見 豊
10. "	国際学部教授	竹下正哲
11. "	国際学部教授	徳永達己
12. "	八王子事務部長	鵜木則夫（事務統括）
13. "	八王子総務課長	上條聡視（事務担当）
14. "	八王子学務課長	加藤秀紀（教学関係担当）
15. "	八王子学生支援室長	橋本知子（学生関係担当）
16. "	八王子国際課長	佐伯孝夫（留学生関係担当）
17. "	八王子事務部審議役	荒川正彦

以上

◆事務局：八王子事務部

※地域連携センター会議は、同センターが実施する事業の内容・方策等について審議・調整する。

尚、上記委員は令和元年度委員である。

編集後記

ご覧いただき、ありがとうございました。今回は、本学外国語学部の教員をご紹介させていただきましたが、如何でしたでしょうか。緑豊かな本学の八王子国際キャンパスには、その他に国際学部と工学部があり、アジアを基点に世界各地との交流を深めています。「社会に開かれた国際大学」を目指す本学としては、今後さらに私たちの強みである外国語教育と共に、国際協力の分野や最先端の工学研究でも地域社会に貢献していくつもりです。どうぞよろしく願いいたします。（尚、作成にあたり前外国語学部長安富雄平教授、岡本慎一郎八王子電算課長にご協力頂きましたことを付記させていただきます。）

副学長（地域連携センター副センター長）

山田政通（言語学博士）

塾

八王子国際キャンパス
〒193-0985東京都八王子市館町815-1
(042) 665-1443



発行：令和元年5月31日 発行者：拓殖大学地域連携センター